二〇二五年度　光塩女子学院中等科【2／1午前】

国語基礎入試問題

二〇二五年二月一日（土）実施

《注意事項》

① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。

② 解答用紙に、受験番号（漢数字・算用数字どちらでも可）と氏名を書きなさい。

③ 解答は、解答用紙に書きなさい。

④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

一　次の(1)～(5)の設問に答えなさい。

(1)　次の各文の――の読みをひらがなで書きなさい。

①　恩師を敬う。
②　出発の合図を送る。
③　家路を急ぐ。
④　神社に参拝する。
⑤　縮尺十万分の一の地図。

(2)　次の各文の――のカタカナの語を漢字に直しなさい。

①　ホケツの選手が活躍（かつやく）した。
②　自分勝手な行動をヒナンする。
③　コクモツを生産する。
④　大陸をジュウダンする。
⑤　両者の争いがサイゲンなく続く。
⑥　当時の生活をサイゲンした展示。

(3)　次の各文の（　　）に最もよくあてはまる言葉を下のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。（同じものを二度使うことはできません）

①　練習試合で、私達のチームは昨年の優勝チームに（　　）。
②　どちらが勝つかわからない試合展開に、観客は（　　）。
③　雷（かみなり）が突然鳴（とつぜんな）りひびいて、彼女（かのじょ）は（　　）。
④　骨折していた友達が歩けるようになって、私は（　　）。
⑤　どんな批判でも受け入れようと、リーダーは（　　）。

ア　手に汗（あせ）を握（にぎ）った
イ　歯が立たなかった
ウ　腹をくくった
エ　肝（きも）をつぶした
オ　胸をなでおろした

(4) 次の（ ① ）～（ ⑤ ）に最もよくあてはまる言葉を後のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。（同じものを二度使うことはできません）

私は毎日、本を読むようにしています。（ ① ）、読書を通して、昔の人や会ったことのない人の考えを知ったり、目に見えない物事に思いをはせる想像力を養ったりすることができるからです。（ ② ）、新しい言葉を学ぶこともできます。（ ③ ）私は、「水魚の交わり」という言葉を、読書を通して知りました。（ ④ ）読書は、身近でありながら深い学びの機会を与(あた)えてくれる大事なものなのです。（ ⑤ ）、読書に夢中になりすぎると、時間を忘れてしまうこともあるので注意しなければなりません。

ア つまり　イ ただし　ウ さらに　エ なぜなら　オ たとえば

(5) 次の〈書き出しの文〉と〈結びの文〉との間にあるア～エの文を、意味が通るように正しく並べかえて、記号で答えなさい。

〈書き出しの文〉白でないものは黒である。もし白でも黒でもないものは、中間の灰色でなければならない。

ア 具体的(※)なるすべての事実は、決して論理的であり得ない。　※具体的なる…具体的である

イ 特に我々の人格ほど、非論理的なものはないであろう。

ウ これが論理の原則であり、我々の推理の方式は、いつでもこの前提の上に組みたてられる。

エ しかしながら多くの事実は、いつも人間の推理を裏切っている。

〈結びの文〉人格の実相(※)は、実に矛盾(むじゅん)そのものである。　※実相…実際のありさま。本当の姿。

二　次の文章Ⅰ「『家を買う』時代」・Ⅱ「職人の腕と木の文化」を読んで、後の問いに答えなさい。

Ⅰ「家を買う」時代

その日の私は、上野村での畑仕事を終えて、畑近くの縫さんの家の玄関に座ってお茶を飲んでいた。縫さんの畑と私の畑は隣り合わせである。

ふと横の十寸角ほどの黒光りする柱をみると、どうやらその木目はケヤキのようである。

「そのケヤキの柱がこの家を支えてきた」

そう言って縫さんは、その柱が自分の山のどの辺りにはえていたものかを話してくれた。縫さんは、まるで大きなケヤキの木が山にはえていた姿を記憶しているかのように話している。しかし実際はこの家は建ってから百年を経過しているのだから、縫さんが知っているはずはないのである。おそらくこの家を支えてきた大黒柱の由来を、両親や祖父母から何度も聞かされてきたのであろう。

この村の旧家は、土台をクリで、大黒柱はケヤキで、柱はツガの古木でつくられていることが多い。クリやツガの良材はもう山にもほとんどなくなってしまったけれど、それでも私がこの村を訪れるようになった一九七〇年頃までは、家を新築したり増築したりするときは、何年も前から材料になる木を自分の山から集め、製材して乾燥をかねて保管している家が結構あった。

家を建てることは遠大な物語だった。村では材料をそろえる前史があり、その上で村の大工さんが姿をみせる。村でただ一人の大工さんは、いつも一匹の犬を連れて仕事に来ていて、建主も木材を運んだり、カンナをかけたりして一緒に仕事をする。ときには村人も手伝いに来て、そうやって一応出来上がっても、最終的な完成がいつなのかもよくわからない。なぜならその後の古くなっていく過程も、また家を完成に近づけていく時間だからである。

木はある程度の年数を経なければ本当の味わいは出てこないし、家がなじんでくるのもそれからである。それまでの間に、大工さんはときどき家のくるいを直しに来てくれる。そうやって暮らしと一体になった家は生まれてくる。とすると、その大黒柱のケヤキが山にはえていた姿を思い描くことのできる縫さんにとっては、家はまだ完成にむかって歴史を刻んでいる途上なのかもしれない。

友人の建築家、藤本昌也さんは、「家を建てる」時代から「家を買う」時代への変化も、日本の木の文化を衰退させたと言う。「家を買う」時代の到来によって、家が完成していくまでの物語はほとんど資金計画だけになった。購入者はモデルハウスやカタログなどをみて、既製服を買うように家を買う。家の最終的な完成にむけて暮らしが関与することもなくなって、竣工時が最良のときであり、古くなるにしたがって家は悪くなっていくという感覚が生まれてきた。竣工後のくるいは「欠陥商品」とみなされることもある。

①「家を建て」ていた時代の家は、純粋な商品ではなかったのである。もちろん、施工主は購入した材料代も、大工や職人の手間賃も支払ったことだろう。しかしそれでもなお、大工さんはお金のためだけとはいえない仕事の仕方をしていた。宮大工のような特別の大工でなくとも、つくりだされた家は商品である前に彼の作品であった。だから竣工後も自分の作品の様子をみに来て、わずかなくるいでも直していった。そして施工主も、新しい家に移り住んでから、暮らしとともに家を完成させていった。すなわちそれは、②どちらにとっても、純粋な商品の取引ではなかったのである。

ところが「買う」時代になると、家は単なる商品になり、それとともに人々の木をみる目も変わってきた。木がもっている一本一本の特性は軽視されてきて、商品としての家を構成する部材にすぎなくなった。それは木材をも純粋な商品に変える。縫さんの家のケヤキの大黒柱に対するような感覚が残っている間は、たとえ購入したものであっても、人々は支払われた代金以上に木のもつ特性に愛着をもっていた。つまり商品価値だけではないものを、一本の柱のなかにみていたのである。

とすれば、家も木材も商品価値でしかなくなったとき、その木材の原料である山の木が商品としてみなされるのも当然ではないだろうか。もちろん私たちは、自然を商品という面だけでみてはいけないと言うだろう。にもかかわらず、木を単なる商品にしてしまった原因のひとつは、商品であることを超えた木と人間の関係を見失った私たちの暮らしにあるのかもしれないのである。

Ⅱ 職人の腕と木の文化

数年前、森林関係の研究所に勤務している研究員のところに、ある村の村長が訪ねてきた。その村の森には、それほど多くはないけれど、いまでは希少価値になった天然のヒノキが大きく育っているのだという。そのヒノキを一番高く売るには、どうするのがよいのかが村長の問いだった。研究員はいろいろ調べたうえで、後日その方法を教えた。それは玄関の表札にして売るのが有利だというものだった。

ところがそう話したら、③村長はきわめて不愉快そうな顔をした。樹齢二百年を超えた大木が、柱になった後も堂々と建物を支えつづけ、生きつづける姿を思い描いていた村長には、それが細切れにされることなど、容認できることではなかったのである。商品価値を高めることが、木を侮辱することであってはならないと思った。

「それがあの頃一番高く売る方法だったのに」

④研究員は私にその話をしてから、「しかし村長の気持ちもわかるし」と言って楽しそうに笑った。自分の提案が拒否されたことは、彼にとっても愉快な出来事だったのである。

木が本来もっている価値を生かすことと、商品として木を高く売ることは、必ずしも一致しない。いまでは天然のスギの銘木は、紙のような薄い板にされ合板に張りつけられて、天井板などになることが多い。それが天然スギを一番高く売る方法でもあるし、

そのことによって天然スギのもっている木目を比較的安い価格で、誰もが楽しめるようになったと評価する意見もある。しかし、それでもなお私は、山奥の路上で合板にされるために乾かされている天然スギをみかけると、私は村長と同じような気持ちをいだくのである。

今日では山の木が建築物に変わるまでの間には、次元の異なる二つの過程が重なりあっているのであろう。それは使用価値と商品価値の違いによって生ずるズレ、といってもよいのだけれど、木自体がもっている価値を生かすか、商品としての木の価値を優先するかをめぐって、木にたずさわる者たちもまた動揺してきた。そしてそのことは、ときに力強く木の育った美しい森と経営効率を優先させた森の違いとなってあらわれ、製材や建築の過程では、職人的な仕事と商品をつくるだけの労働の違いとなってくる。

たとえば製材工場を訪ねても、スギやヒノキなどの国産材をひく工場と、輸入材をひく工場とでは、雰囲気がずいぶん違う。台の上に置かれた丸太が電動ノコギリのなかに引き込まれ、角材に変わっていく工程はどちらも同じなのに、国産材の工場には、職人の仕事場のような雰囲気が漂っている。ところが輸入材専門の工場に行くと、流れ作業のなかから規格品の商品がつくられていく⑤「近代工場」のイメージに変わる。

国産材は、どこにノコギリの刃をあてるかで木目の出方も変わり、木の価値も商品価値も変わってくるから、木目の出具合を読む職人の経験やカン、コツが工場を支えている。ところが輸入材は木目も一定のものが多く、しかも大壁工法などの柱のない家の部材になることが多いから、部品をつくる自動化工場のようである。最近では労働力不足に対応して、コンピューター製材が関心を高めているけれど、それも職人の腕を必要としなくなった輸入材専門工場での話にすぎない。国産材の工場はいまも職人の世界である。

その職人は板や角材などの商品をつくる。しかしその商品をつくる過程は、木が本来もっている性質を生かしていこうとする職人仕事の過程でもあった。

山の木を単なる商品にしてしまわないためには、職人的な腕が生きていなければいけない。確かに山の木は、林業家から製材業者へ、工務店から消費者へと、商品として流れていく。ところがこの流れのなかに、美しく、大きく森を育てていこうとする村人の腕や、製材職人の腕、木の特性を生かしていこうとする大工の腕などが健在である間は、木と人間は一体化して、木の文化をもつくりつづけることができる。

木の文化は、天然のヒノキが細切れの板にされるのをかわいそうだと感じる、あの村長の気持ちに支えられてきた。そしてその気持ちを仕事のなかで実現させる職人たちの⑥とともにあったのである。（内山節『森にかよう道――知床から屋久島まで』）

※注　十寸角…約三十センチ四方。　衰退…勢いがおとろえて悪い状態になること。　モデルハウス…住宅の見本として建築した家。
竣工…建物などができあがること。　欠陥商品…不備のある商品。　施工主…通常、建築を請け負った業者。ここでは、家の建築を業者に依頼した人。

宮大工…神社や寺院などの建築を専門に行う大工。　侮辱…ばかにしてはずかしめること。　銘木…由緒などがあって名高い木。

問一　――①「『家を建て』ていた時代の家」に関わるものを次のア～カから三つ選び、記号で答えなさい。

ア　家が完成していくまでの過程で特に重要なのは、資金計画である。
イ　家をつくることは遠大な物語で、建主も家づくりの作業に参加する。
ウ　建主は既製服を選ぶように、カタログを見て希望の家を注文する。
エ　竣工時が、その家の最も良い状態である。
オ　大工はつくった後も家の様子を気にかけ、くるいがあれば直す。
カ　家が最終的に完成するのがいつなのか、定かではない。

問二　――②「どちらにとっても、純粋な商品の取引ではなかった」について説明した次の文章を読み、[1]～[3]にあてはまる語を答えなさい。[1]は反対の意味を持つ漢字を組み合わせた二字の熟語を考えて答え、[2]・[3]は字数の指示に従ってⅠの文中から抜き出して答えなさい。

・商品とは、通常、[1]のためにつくられる品物を指す。純粋な商品であれば、完成した家に対して代金が支払われて取引が完了すると考えられる。しかし、大工にとって家は商品である前に彼の[2]（二字）であり、よりよい状態を保つために手入れを続けていくべきものであった。また、建主にとっては、家は自分の[3]（三字）を関わらせることで完成していくものであった。両者にとって、家はお金と交換するだけの品物ではなかったのである。

問三　――③「村長はきわめて不愉快そうな顔をした」の理由の説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　ヒノキを表札に加工するという平凡な方法は、森林の研究員の提案としてふさわしくないと思ったから。
イ　大木に成長したヒノキを表札に加工してしまっては、たいした利益にならないだろうと思ったから。
ウ　立派に育ったヒノキを表札にするために細切れにしては、その木の本来の価値を生かせないと思ったから。
エ　大きく育ったヒノキを立派な柱にしてほしいという自分の言葉を、研究員に無視されたと思ったから。

問四　――④「研究員は私にその話を～愉快な出来事だったのである」に関して、次の各問いに答えなさい。

(1)　研究員が笑ったことの説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　自分がした提案は実はヒノキを高く売るには有効な方法であったのに、それを拒否した村長のことを、見る目が無いとおかしく思っている。

イ　自分がした提案はヒノキを高く売るために有効ではなかったため、それを拒否した村長の判断が正しかったと満足している。

ウ　自分がした提案はヒノキを高く売るには有効な方法であったが、それを拒否した村長のヒノキに対する思いを好ましく思っている。

エ　自分がした提案はヒノキを高く売るために有効な方法ではあったが、もっと高く売る方法を探そうとする村長に共感を示している。

(2)　「彼にとっても愉快な出来事だったのである」の「も」は、他にも同じようなことがあることを示す助詞です。この言葉に注目すると、「彼」の他にも、この出来事を愉快と感じた人物がいることがわかります。それは誰ですか。本文中の言葉を抜き出して答えなさい。

問五　――⑤『近代工場』と対比されている言葉として最もふさわしい表現を、Ⅱの文中から六字で抜き出して答えなさい。

問六　⑥に最もよくあてはまる言葉をⅡの文中から漢字一字で抜き出して答えなさい。

問七　『「木の文化」について説明した次の文章を読み、[1]～[3]に最もよくあてはまる二字の熟語をⅠの文中からそれぞれ抜き出して答えなさい。

・Ⅰの文中では、家の柱に特別な思いを抱いている住人が紹介されている。自分が生まれる前からケヤキの柱は家を支えているのにもかかわらず、住人はケヤキが山に生えていた姿を記憶しているかのように話している。また、Ⅱの文中では、ヒノキが細切れの板にされるのをかわいそうだと感じる村長が紹介されている。村長は、切られた後もヒノキが柱として堂々と生き続ける姿を思い描いていた。ケヤキの過去に思いを寄せるⅠの文中の住人も、ヒノキの今後を思いやるⅡの文中の村長も、木を単なる[1]とは見ていない。育ってきた歴史、たたずまいなど、その木がもっている一本一本の[2]が発揮されることを重視し、木に強い[3]をもっていることがわかる。このような、[1]であることを超えた木と人間との関係が、木の文化を支えてきたのである。